



枝肉成績に及ぼす影響について検討しました。  
その結果、肥育前期(9〜13・9カ月齢)の粗飼料摂取量が増加し、24カ月齢以降で

### 黒毛和種子牛 濃厚飼料多給時期

## 育成後期に給与制限 4・5等級率変わらず

肥育前期の粗飼料摂取量と枝肉成績

	粗飼料摂取量 (乾物kg)	出荷体重 <sup>3)</sup> (kg)	枝肉重量 (kg)	4・5等級率 (%)
慣行区 <sup>1)</sup>	562.0	817.0	522.4	100.0
育成前期多給区 <sup>2)</sup>	621.0	867.3	552.4	100.0

- 1) 慣行区：濃厚飼料を月齢に応じて増給し、8カ月齢で5kg/日を給与する区  
2) 育成前期多給区：濃厚飼料を5カ月齢をピーク(4.5kg/日目安)として増給し、その後漸減して7カ月齢以降は4kg/日に制限する区  
3) 両区とも27カ月齢で出荷

本県の黒毛和種肥育において、肥育前期に濃厚飼料の給与量を制限し、良質粗飼料を多給することで飼料の利用効率を高め、良好な発育と枝肉成績を得る「長崎型新肥育技術」の普及が進んでいます。一方、生産現場では、肥育前期に粗飼料を十分量摂取できない事例も散見され、これは、体重が重視される子牛市場に対応するため、出荷前の子牛に濃厚飼料が多給される傾向にあることが要因の一つと考えられます。そこで、黒毛和種去勢牛を用いて、濃厚飼料を育成前期(90〜179日齢)に多給し、後期(180〜269日齢)に制限する給与方法が、その後の肥育期の粗飼料摂取量と発育および

増体が向上し枝肉重量が大きくなる傾向にありました。また、4・5等級率に差はありませんでした。本研究結果は、「長崎型新肥育技術」にスムーズに移行できる子牛の育成技術として、肥育経営、

繁殖経営双方の所得向上につながるものと考えておりますので、ぜひご活用ください。  
(長崎県農林技術開発センター 畜産研究部門 大家畜研究室 主任研究員 横石里紗)